

胃食道逆流症に伴う慢性咳嗽の診断におけるFrequency Scale for the Symptoms of GERD (FSSG) の有用性

京都大学医学部呼吸器内科 上田哲也、新実彰男、竹村昌也、山口将史、松岡弘典、陣内牧子、大塚浩二郎、小熊 毅、竹田知史、松本久子、三嶋理晃

【背景・目的】胃食道逆流症 (GERD) に伴う慢性咳嗽は、本邦でも近年増加が指摘されつつある。定型症状が乏しい例が少なくなく、gold standardの検査である24時間食道pHモニタリングは普遍性、侵襲性、特異性に問題があるため、その診断にはプロトンポンプ阻害薬 (PPI) による治療的診断が推奨されている。本邦から報告された簡便な問診票FSSG (Kusano et al. J Gastroenterol 2004) はGERDの診断や治療反応性の評価に有用とされており、慢性咳嗽の鑑別における有用性を検討した。

【方法】慢性咳嗽患者の初診時にFSSGを施行し、PPI (ラベプラゾール) 治療による咳症状改善からGERDに伴う慢性咳嗽と診断したGERD例 (他疾患との合併例を含む) と、咳喘息など他疾患としての特異的治療で咳嗽が消失したりGERDに伴う慢性咳嗽を疑ったがPPIで改善しなかった非GERD例とで比較した。

【結果】GERD例のFSSGは、非GERD例に比し有意に高値を示した。

【考察】FSSGが慢性咳嗽の鑑別に有用な可能性が示された。